

第5話 地方の騒乱と西南の役

大変革の余波。新政府に対する不平が爆発して各地に騒乱が起こる。
ついに西南の大役となって、一時は全国をも動揺させるが、やがて鎮定して
中央政府威権がいよいよ確立する。

新政府に対する不平 反抗

明治維新がわが国未曾有の大変革であったことは、すでに皆さんが詳しく見て来た通りですが、こうして政治や社会の上に盛んに改革が行われると、時にはややもすれば不平を抱いて、これに反抗する者のあるのが世の常です。明治の新政府に対してもやはりそうでした。政見を異にしている相争う者があったのは勿論だが、又、旧習を慕って、新政を喜ばない者も多かった。

そのために、明治3年の始めから4, 5, 6年にかけて、全国各地に武士階級の騒擾や平民階級の暴動一揆が起こったが、幸いにこれは何れをも大事に至らずに平定した。ところが、たまたま征韓論が敗れて、西郷隆盛を始め、これを主張した者らが官を辞して野に下ると、新政府を喜ばない不平党は、しだいにこれらの征韓論者と相結んで諸所に乱を起こした。

その第一著は、江藤新平を首領とした佐賀の乱です。

佐賀の乱

初め新平が職を辞して郷里佐賀に帰ると、そこには、かねてから征韓を主張する一派がいて、直ちに彼を仰いで首領とした。この征韓党に対して、佐賀にはまた憂国党という、新政を厭い封建の旧制に復そうと謀る一派があったが、現政府に反対する点では同じですので、俄かにこれも彼の配下に属した。

同じく佐賀の藩士で、そのころ宮内省出仕となっていた島義勇は、はるかに郷里の形勢の漸く不穏になったのを聞くと、これを鎮撫するためにと暇を願い、佐賀に帰って来たが、忽ち憂国党の首領に推されたので、ついに新平と合体して乱を起こした。

明治7年2月、彼等は先づ小野商会その他の富豪を襲って、金銭および軍需品を無理借りし、ついで佐賀城を襲って熊本鎮台の兵でこれを守っていた権令岩村高俊を走らせた。

そこで朝廷は、参議大久保利通に急いで鎮撫に下らせた上に、更に嘉彰親王を征討総督としてこれを討たせた。利通は19日に博多に上陸したが、この日、陸軍少将野津鎮雄は官兵を率いて、久留米、筑後川の方面から進み、同山田顕義は筑前方面から進んで、次第に賊軍を圧迫して行って、ついに3月1日に佐賀城を陥れた。

新平、義勇らは逃げて鹿児島に至り、西郷隆盛に頼ろうとしたが、隆盛が応じなかったので、新平は更に土佐に走って、ついにそこで捕えられた。義勇らは鹿児島で捕えられた。そして、新平、義勇の2人は梟首の刑に処せられ、部下の者は断罪、或いは懲役、或いは禁固などに処せられて、余党も悉く

平定された。時に新平は40才、義勇は53才でした。

じんふうれん らん
神風連の乱

こうして、佐賀の乱は思いの外に早く片づいたが、新政府を喜ばない不平党はまだ各地に残っていた。熊本の士族太田黒伴雄、加屋霽堅らが首領になって、組織した神風連という団体は、神道を尊び、西洋の風が輸入されるのを極端に憎んでいたが、明治9年3月28日、政府が帯刀禁止の令を出すにおよんで、大いにこれを憤慨し、ついにその年10月24日、急に乱を起こして熊本鎮台を襲い、司令長官種田政明をその私宅で殺し、県令安岡良亮を傷つけた。しかし、その翌25日には、忽ち鎮台兵のために撃破られて、伴雄、霽堅らは戦死して、余党も悉く平らいだ。これを神風連の乱という。

あきづき らん
秋月の乱

この時、福岡県秋月の士族宮崎車之助らの一党もこれに応じて起って、福岡城を襲おうとしたが、忽ち神風連の破れたのを聞いて、遠く山口県萩の同志前原一誠らと一緒になろうと、転じて豊前の豊津まで進んだところを、小倉分営から出動した官兵のために撃破された。間もなく車之助は自殺して、余党の多くは捕えられて、この乱も平らいだ。世にいう秋月の乱がこれです。

はぎ らん
萩の乱

神風連の乱の鎮定されたのが10月25日で、秋月の乱の起こったのがその翌々日でしたが、翌28日には、前参議兵部大輔前原一誠が兵を山口県萩に挙げた。一誠は明治3年9月2日に木戸孝允らと意見の合わないところから官を罷めて、郷里萩に帰って以来、常に政府の政策に対して不満をいだき、朝鮮の問題についても、千島樺太の交換についても、政府の処置を非難しつづけていたが、熊本の乱が起こるに及んで、その党をあつめて山口県庁を襲い、はるかに神風連に応じようとしたのです。これもまた忽ち広島鎮台の兵に撃破られて、一誠らは捕縛され、後、斬罪に処せられた。これを萩の乱という。

さいごうたかもり しがっこう おこ
西郷隆盛が私学校を興す

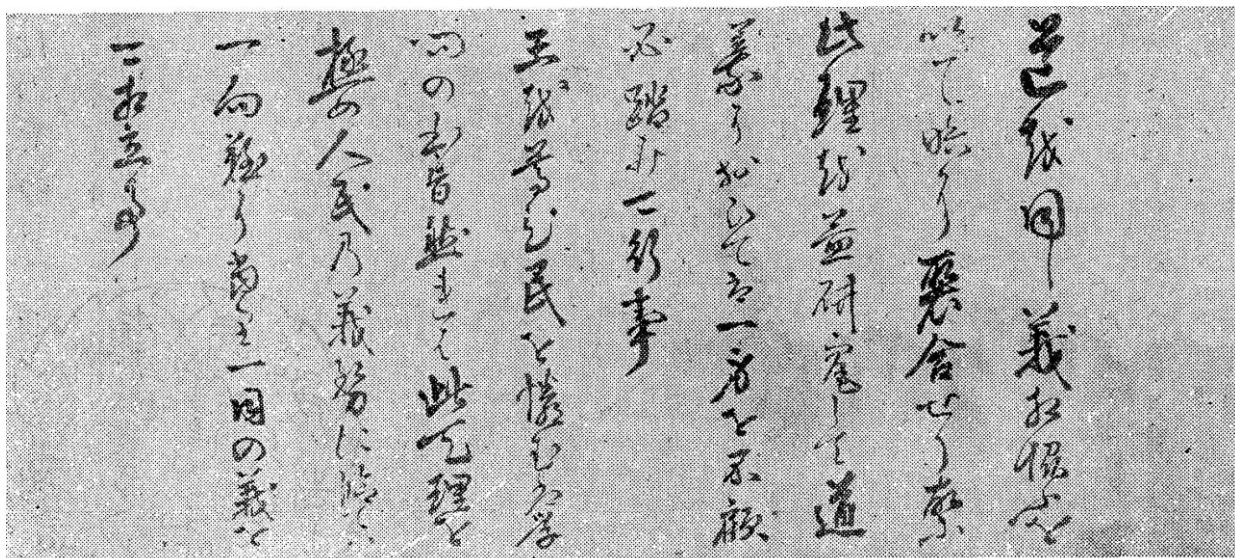
これより先、西郷隆盛が官を辞して郷里鹿兒島に帰ると、桐野利秋、篠原国幹らを始め、薩摩出身の少壮血気の軍人や羅卒の多くもまた彼を慕って陸続と帰郷した。この事はすでに前にも少し述べたが、こうして一時にどっと不平を抱いた者らが帰ったために、恐らく、そこには自然と不穏な気合が醸されたでしょう。そこで、隆盛は彼等が過激に走って、方向をあやまり得るとの心配から、利秋、国幹らと謀り、明治7年2月、城山の麓の島津家の厩址に私学校を興して、彼等を教育することにした。直接の監督には利秋、国幹、村田新八らに当たさせたが、その全体の統制には隆盛が自ら当たった。

彼はまたこの学校の綱領に二か条を自ら書いてこれを掲げさせた。

道を同じ、義相協うを以って、暗に衆合せり。ゆえにこの理を益々研究して、道義において是一身を不顧、必ず踏み可行事。

王を尊び民を憐れむは学問の本旨。然ればこの天理を極め、人民の義務に臨んでは、一向

難にあたり、一同の義を可相立事。^{ぎ あいたつべき}



さいごうたかもり じひつ し がっこうこうりょう
西郷隆盛 自筆の私学校綱領

というのがこれで、第一条の中の「暗に」は、暗号の暗で、即ち期せずして集まったのだというところに、この学校の成立の径路が明らかにされている。「故に」以下では成立の趣意が窺われる。又、第二条の尊王憐民を学問の本旨とするところは、この学校の方針、目的、本領が見られます。

隆盛の名望

さて、隆盛が学校を開いたということが四方に伝わるや否や、彼の名望を慕って来たり集まる者が忽ち数千人に達し、やがて分校が鹿児島県下に13も設けられるに至った。しかも生徒らは、みな隆盛と死生を共にすることを誓い、機会もあれば起って政府を倒して、再び隆盛を世に立たせようと思っていた。

それで佐賀の乱が起こった時にも、又、熊本の神風連の乱が起こり、秋月の乱、萩の乱がこれにつづいた時にも、私学校の生徒らは好機こそ来たと、忽ち起ってこれに応じようとしたが、隆盛が固く抑えて纔かに事を挙げさせなかったといわれる。

隆盛の真意

とはいえ、彼に兵を用いる意志が全然なかったとは考えられない。私学校の綱領から見ても、又、その実際の教育が、学課を重んじずに、専ら銃砲の操練と心気の養成とに力をおいた点から見ても、いつかはこれを兵として役立たせようとはしていたのでしょう。桐野利秋の談論の中に、「今の東京政府の者らに一体何が出来よう。万一、姑息の条約を定め、国威を失墜するような事があつたら、それこそ国家の重大事だから、いよいよ其の改定の日ともなれば、人民は当に奮い立って、政府の軟弱輩を一掃し、これに代わって諸外国との交渉に当たらなければならない。薩、隅、日、(訳注：薩摩、大隈、日向)3州の子弟が南洲翁(隆盛)を奉じて、海内の大事に任ずるの秋でもあろう」という言葉がある。

多分、隆盛の意志もそこに在ったのであろう。即ち、やがて2,3年の後には、条約改正の問題が起こるが、その時こそ、諸外国と対等の条約を結ぶことの出来ない政府の責任を問う義軍を起こして、

第5話 地方の騒乱と西南の役

なんじゃく とうろしや がわ やしな じつりよく はつき そうけん にな
軟弱な当路者にとって代り、多年の間に養った実力を発揮して、日本国家を双肩に担おうとしたのだ
ったでしょう。

ところが、若くて血気に逸る生徒らは、そういう深謀遠慮を会得しなかった。彼等は、自分たちの
勢力がますます増大するにつれて、しだいに過激に走り、その行動も時に常軌を逸して、ともすれば爆発
しかねない情勢を見せて来た。言ってみればこの時の鹿児島県は、政府にとって、さながら一敵国の観
があったのです。

おおくぼさんぎ たいさく 大久保参議の対策

そこで、政府は、どうにかして私学校徒を抑圧し、天下の治安を維持しなければならないとの考えか
ら、参議大久保利通は大警視川路利良と謀り、その腹心である薩摩出身の警部、巡查、壮士、学生ら数十
人をひそかに帰郷させた。そして、私学校徒の行動を探偵させ、彼等の間を離間し、攪乱し、その結東
を破らせようとすると共に、更に、ひそかに汽船赤龍丸を鹿児島に遣わし、そこに在った海軍造船所及
び大阪砲兵工廠鹿児島属廠の兵器弾薬を大阪に移させることにした。明治10年1月の事です。

しがっこうと ぼうはつ 私学校徒の暴発

すると、その月の半ばごろから、「政府は多数の刺客を送って、わが西郷先生を暗殺しようとしている」
という流言が鹿児島県下一帯に行われ、忽ちこれを信じた私学校徒は大いに政府の執った手段の陰險な
のを憤っていた。更に政府が兵器弾薬を移そうとしているのを知ったために、「さてこそ、政府は兵を
起こして西郷先生および我々私学校徒を撲滅しようとしている」と即断し、ここにいよいよ激昂して、乃
ち急に起って、1月30、31日の両日、海軍造船所および属廠の倉庫を襲い、小銃、弾薬をほしいままに
略奪した。

のみならず、翌2月3日、例の探偵の一人と目されていた少警部 中原尚雄を捕らえて、これを拷問し
て、彼等の帰省した目的が、実は西郷を暗殺し、東京政府にこれを報告して速やかに陸海軍の発動を請い、
私学校徒を皆殺しにする事にあるという口供を作らせるに及んで、暴徒らはいよいよ勇躍した。

たかもり きよへい 隆盛の挙兵

この時、隆盛は新八と共に大隈地方に遊獵中で、鹿児島にはいなかったし、その他の幹部連中も他
に出ていて、この略奪や拷問には全く与らなかったが、すでに事が斯うなってしまう以上は、いか
んとも仕方ないので、隆盛もついに意を決して断然と兵を挙げた。明治10年2月15日、彼は政府に尋問
する所があると称して、集まってきた青年15,000を率いて鹿児島を出発した。利秋、国幹、村田新八、
永山弥一郎、別府晋介、池上四郎らがその部将でした。鹿児島県令 大山綱良もまたこれに応じて、
官金を出して軍費を助けた。

こうして2月21日、彼等は肥後の川尻に着いて、ここに本営を置いたが、この時、熊本の士族池辺吉
十郎の率いる熊本の学校党1,500を始め、人吉、日向方面からも隆盛を慕って来て加わる者が多かつた
ので、忽ち賊軍の総勢は20,000を超えて、大いに士気が振るった。

第5話 地方の騒乱と西南の役

くまもとじょう かこ 熊本城を囲む

そこで、その翌21日から進んで熊本城を囲んだ。城は、昔、築城の大家といわれた加藤清正が築いた天下の名城です。これを守る者は熊本鎮台司令長官陸軍少将谷干城で、参謀長は陸軍中佐樺山資紀、参謀は同少佐児玉源太郎、士卒は凡そ3,500人でした。はじめ賊軍は、城こそ九州第一の堅城でも、守る者が取るにも足らぬ百姓兵である以上、たとえ100,000あったところで、これを陥れるのに何の手間ひまがいろいろかと、高をくくって遮二無二攻め立てたが、どうして鎮台兵も中々強く、百姓兵と見くびるわけにも行かなかった。



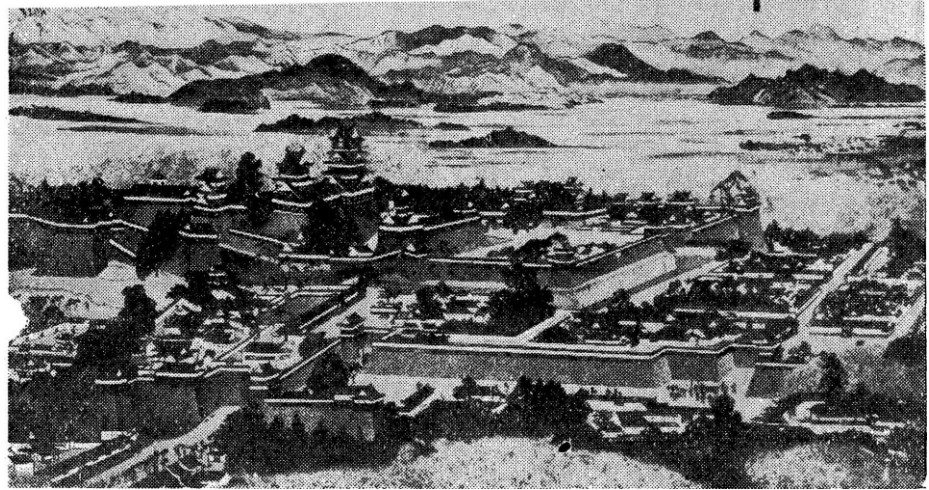
くまもとじょう こうい
熊本城の攻囲

しまづし もん
丸に十字は島津氏の家紋

第5話 地方の騒乱と西南の役

実際、この城さえ落ちれば、九州全体は殆ど賊軍の手に入るわけでもあったし、そうなればまた、彼等がひそかに予期していたように、全国にちらばっている不平士族の輩が、一斉に蜂起することにもなったかも知れない。

しかし、谷少将がよく部下の結束をはかって、固く死守してびくともしなかったために、ついに賊軍は急に作戦を一変して、池上四郎に3,000余の兵を付与して専ら熊本城の攻囲に当たらせ、その余りは、



西南戦役前の熊本城

利秋、国幹、新八、晋介らが率いて、山鹿、田原坂、木留方面に向かって進撃を開始することにした。

逸早く官軍の外からの援兵を突破し、長崎、小倉を占領して、九州全部を先づその手に収めようとしたのです。

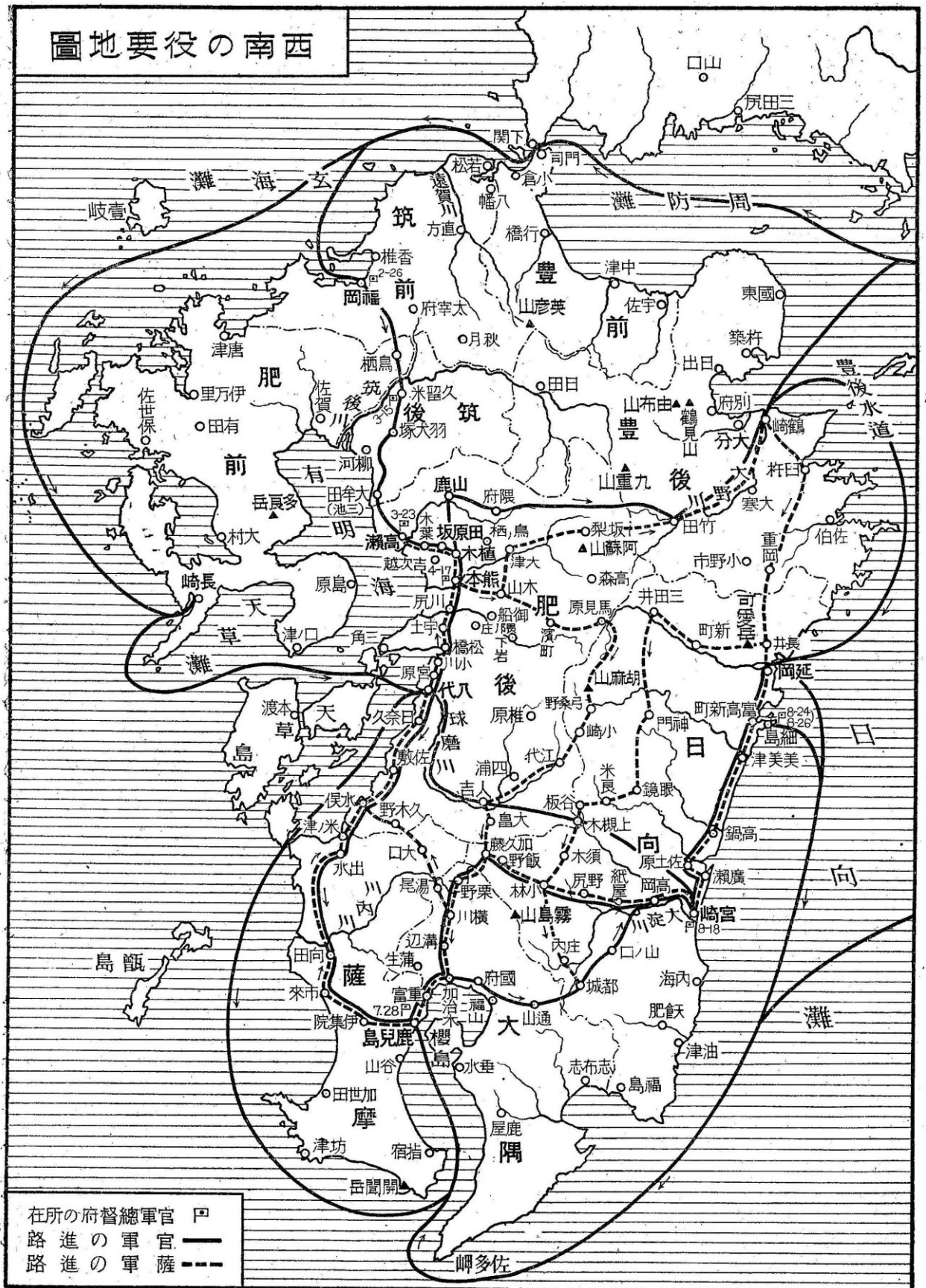


熊本軍の首脳部 前列中央が谷少将、向ってその右が樺山参謀長

征討令が下る

けれども、それにはすでに時が遅かった。

これより先き、明治天皇は1月28日に京都行幸され、30日に先帝の10年祭を行われ、更に大和に行幸、2月9日、奈良の正倉院をご覧になり、11日の紀元節に畝傍山の神武天皇の陵に参拝され、同16日に京都に還幸された。その折から、鹿児島の変報が達したので、そのまま京都に駐輦になり、鹿児島県暴徒の征討を仰せ出でされた。即ち、19日に有栖川宮熾仁親王を征討総督として、陸軍中将山県有朋、海軍中将川村純義を参軍として、陸軍少将野津鎮雄、同三好重臣、同三浦梧楼、同大山巖らに各旅団の兵を率いて賊を討たされた。そしてその25日には、隆盛、利秋、国幹らの官爵を削った。



賊軍の北進

こうして官軍は、2月22日に早くも博多に上陸した野津、三好両少将の率いた軍を始めとして、後続部隊も陸続と南進をつづけ、一刻も早く熊本城を救おうとした。しかしすでにこの時には、賊軍の大部分が肥後の北部まで進んで来ていたのみならず、現にその22日の晩のごときは、急いで熊本に入城しようとして来た小倉の歩兵第14連隊長心得陸軍少佐乃木希典を、植木町外の向坂に要撃してこれを破り、そ

第5話 地方の騒乱と西南の役

れんたいき うば きせい
の連隊旗を奪って大いに氣勢をあげたというようなことまで起こっていたのです。

賊軍はその翌23日、勝った勢いに乗じて、希典が前夜敗れて木葉に退却したのを更に追撃して、
たかせ や な としあき くにもと しんすけ しんはち もうしょう たいきよ
高瀬に退却を止む無くさせた上に、越えて27日には、利秋、国幹、晋介、新八らの猛将が大挙して高
だっしゅ
瀬を奪取しようとした。

はかた
博多から南進して来た官軍が、初めて真正面から賊軍に当たったのがこの日の高瀬の戦いです。さ
もうしゅう すこぶ するど ほとん
すがに賊軍の猛襲は頗る鋭く、午前9時から夕方まで激戦がつづいて、一時は殆ど奪取が成功しそ
ほうへいたい みなみのせき らいえん およ ぜんせん
うにみえたが、野津少将の率いる砲兵隊が南関から来援するに及んで、賊軍はついに敗れて、全線をあ
たいきやく
げて退却した。

たばるざか あくせん 田原坂の悪戦

こうして、彼等の北上はここに全く阻止されたが、しかしまた官軍をも容易には南下させなかった。
このは たばるざか きちじこし きどめ やまが けん ふせ
彼等は高瀬から退くと、木葉、田原坂、吉次越、木留、山鹿などの険によって、官軍を拒ぎ、熊本城との
さえぎ
連絡を固く遮ったのです。 わけても私学校徒が最も精鋭をつくして死守したのは田原坂でした。

官軍は3月3日に木葉を占領して、翌4日から間断なくこれを攻撃したが、賊軍は勇敢に突撃を繰り返
しりぞ
して一歩も退かず、両軍共に、いたづらに多数の死傷者を出すのみでしたので、官軍はそこを地獄峠と
あくせんくとう
呼ぶに至ったというのを見ても、いかに悪戦苦闘したかがわかります。

けれども、ここを突破しなければ熊本城を救うことは出来ないのですから、どんな無理をしてでも打
とっぱ
ち破って通ろうと、官軍は更に色々工夫して攻め立てた。 けいしちょう じゅんさ そしき ぱつとう
警視庁の巡查をもって組織した有名な抜刀
たい ぞく るい とつかん
隊が賊の壘に突貫したのもここです。

ぞくぐん たいきやく 賊軍の退却

激戦16日、3月20日に至って、さすがの賊軍もついに支えかねて、植木町外の向坂に退却した。
やまが きかい そくめん こうげき きりのとしあき とす
山鹿に在って、機会もあれば官軍を側面から攻撃しようとしていた桐野利秋の軍も、その翌21日に鳥栖方
きちじごえ げきせん ゆうしょうしのはらくにもと たお
面に退却した。 吉次越の賊軍も、3月4日の激戦に、勇将篠原国幹を斃されたにもかかわらず、なお
がんきょう さんのたけ
頑強に持ちこたえていたが、4月1日、ついに三岳に退却した。

それで、官軍の本営も、3月15日に福岡から久留米に移っていたのだが、同23日には更に高瀬に進め
くるめ たかせ
られたが、しかし熊本城との連絡はまだまだつかなかった。

ちやくし かごしまさしつかい 勅使の鹿児島差遣

これより先き、朝廷は元老院儀官 柳原前光を勅使とし、陸軍中将 黒田清隆、海軍少将 伊東祐磨ら
やなぎはらまえみつ ちやくし くらだきよたか いたうすけまる
をこれに随行させて鹿児島島の島津家に差遣わせ、久光、忠義の父子に諭して、県民に暴動に加わらないよ
ずいこう しまづけ さしつか ひさみつ ただよし ふし さと
うにさせた。

この時、勅使は護衛艦8隻を随えて、堂々と鹿児島島に入港して、勅命を伝えて後、鹿児島属 廠を
ごえいかん せき したが どうどう ちやくめい ぞくしょう
毀し、製弾機を大阪に移すことにした上に、賊軍の軍費および糧食の調達に当たっていた県令 大山綱
こわ せいだんき りょうしょく ちょうたつ けんれい おおやまつな
良を捕らえて、賊の後援を絶っておいて、3月12日に鹿児島島を出発し、翌日に長崎に寄港し、ここに黒田
よし と こうえん た きこう
良を捕らえて、賊の後援を絶っておいて、3月12日に鹿児島島を出発し、翌日に長崎に寄港し、ここに黒田

清隆らを残して、16日に京都に帰った。

べつどうたい かつどう
別働隊の活動

清隆は勅使の護衛ごえいに当たった兵士巡査らをもって別隊を組織し、賊軍の背後はいごからこれを攻撃する策を立て、13日に電報でんぽうで政府せいふに建議けんぎすると、政府は14日に彼を征討参謀せいとうさんぼうに任じてその策を行わせることにした。

有名な別働隊べつどうたいが即ちこれで、第一に先づ陸軍少将たかしまとものすけ高島鞆之助ひなぐの一隊が、19日に肥後の日奈久の西南方に上陸して、その辺とんしゅうに屯集とんしゅうしていた賊ぞくを駆逐くちくしながら、進んで八代やつしろに入ったのを手始めに、22日には黒田参軍が八代に入り、ついで陸軍少将やまだあきよし山田顕義かわちとしよしが、同川路利良うとらもまた別働隊に参加を命じられて八代に到着、着々と賊軍を撃ち退けながら、次第に進んで、4月1日には宇土うとを占領せんりょうし、5日には本営を同地に進めた。

このころ、福岡、山口、大分、愛媛などの各地にも暴徒が起こって、いづれも私学校徒に応じたが、みな間もなく平定した。

ところで、一方、熊本城はその後どうなったか？

ろうじょうぐん こんく
籠城軍の困苦

籠城ろうじょうの初めはじのころに、官軍との連絡みっしをはかるために密使を出した。（その一人の谷村計介たにむらけいすけが、農夫のうふに変装して城を抜け出し、いくたびか死地しちをくぐって、漸く来援軍の野津少将ようやの陣営じんに至り、首尾よくその使命しめいを果たした後に、3月4日の田原坂の攻撃に進んで従軍じゅうぐんして、散弾さんだんに中って戦死せんしを遂げた話は、殊ことに悲壮ひそうなものとして伝えられている。）

漸く来援の近づいたことを知って以来、城兵はいよいよ勇んで頑強がんきょうに応戦おうせんをつづけていたが、囲みを受けてから40余日にも及んだころには、糧食りょうしょくも次第に残り少なくなり、弾薬もまた殆ど尽きようとして来た。

減食げんしょくを行い、或いは飯おこなを粥あるにし、或いは濠めしの魚かゆを捕らえたり、屠あるったりして食料ほりにあてていたが、それでもやがて支えきれなさそうになって来た。而も援兵しかなはなお来ないのです。

城兵一同は固く結束して、今はもう城を枕まくらと覚悟を決めるに至った折から、八代方面かつしろに上陸した別働隊が、つい近くまで進んで来たことがわかったので、谷司令長官すなわは乃ちここに一大決心をして、城兵の一部をもって城の囲みを突破し、援軍のとの連絡をつけようという策を立てた。そして、この重任を果たすことになったのが、陸軍少佐おくやすかた奥保鞆すなわです。



熊本城 谷村計介の銅像

ひやくしょう
本百姓像は先の戦争の金属
きょうしゅつ
供出で撤去、1998年に軍服姿
で再建。

とつたい だっしゅつ
突圍隊の脱出

4月8日の朝早く、奥少佐は部下の一大隊を率いて、友軍の援護の下にひそかに城を出で、霧に紛れて水前寺に至り、それより敵の陣地をいくつか突破して、午後4時には首尾よく宇土の別働隊本営に着いた。死傷者は僅かに8名に過ぎなかったが、これは沿道の賊軍が、その大半はすでに陣地を離れて他に向かい、あとには僅かの兵を置いて虚勢をはっていたからだといわれる。

奥少佐から熊本城の危急を聞き、又、これを包圍している賊軍の様子をも詳らかにすると、黒田参軍はすぐに兵を進めて城を救うことにした。

じゅうい と
重圍を解く

こうして攻圍軍の背後を、各方面から包んで攻撃して、4月14日に山田少将は進んで川尻を占領し、その部下の陸軍中佐 山川 浩の一隊は長驅して熊本城に入った。実に城兵は2月22日以来、籠城すること52日で初めて援軍を迎えたのです。彼等の喜びがいかにも大きく、異常なものであったかは、容易に皆さんにも想像されるでしょう。

さて、城外の官軍との連絡が、こうして完全についてしまってみれば、さすがの賊軍も今は退却するより外には道が無かったので、その夜から続々と熊本の東方約12kmの木山町を指して退却しはじめた。翌15日、城中でもこれを知って、急いで兵を出して市中の残兵を追払った。囲みはここに初めて解けた。

この日、黒田参軍、山田、川路両少将らも熊本に入城したが、北方から来た征討軍も、この日と翌16日とに続いて熊本に入込んだ。17日には総督宮も入城されて、ここをその本営とされた。

実に熊本城が陥ると否とは、前にも少し述べたように、国内の大勢にもかかわるところでしたのに、谷少将以下の将士が、死なば諸共の精神をもって協力一致、よく万苦を凌いで、これを支え通したのは誠に偉かった。これがために、全国各地の不平士族や政府反対党らも、ついに乗じる機会を得ずして起つことを止めたといわれます。

たかもり ひゅうが はし
隆盛ら日向に走る

さて、熊本城の囲みを解いてからの賊軍は、ただただ敗れる一方でした。本営を木山に置いて、北は大津から南は御船に至る約24kmの間に蜿蜒と長い陣地を構え、機会もあれば再び熊本城を襲おうとはかったが、その追も無く、勝ちに乗った官軍に忽ち追撃されて、20日には下矢部方面に退き、21日には浜町に退き、さらにその翌22日には肥後南部の要衝である人吉に退いた。暫くこの天陰に拠つて官軍の攻撃を防ぎ、豊後方面に向寄せた一隊と、鹿児島方面に向寄せた一隊とに官軍を攪乱させながら、徐に勢力を挽回しようとしたのです。けれども、大兵を部署して圧迫して来た官軍の勢力は、更に一層さかんでしたので、ついに支えることが出来なくなって、6月1日には人吉も陥った、隆盛らは日向に走って、本営を宮崎に置いた。

第5話 地方の騒乱と西南の役

豊後に向った一隊も、一時は頗る勢いがよく、竹田から進んで、鶴崎を占領し、将に大分までをも奪おうとするまでに至ったが、やがて官軍の大兵が出動してから後は、戦う毎に敗れて次第に圧迫され、6月9日には臼杵を捨て、次いで重岡を捨て、ついに日向の延岡に走って、その地の賊軍と一緒にになった。

鹿児島方面に向った軍も、すでに上陸していた川村参軍の率いる官軍に攻立てられて、一向に勝味がなく、まもなく薩摩を逐出されて、大隈から日向に逃れ、ついに都城の賊軍と合した。

官軍の侵攻

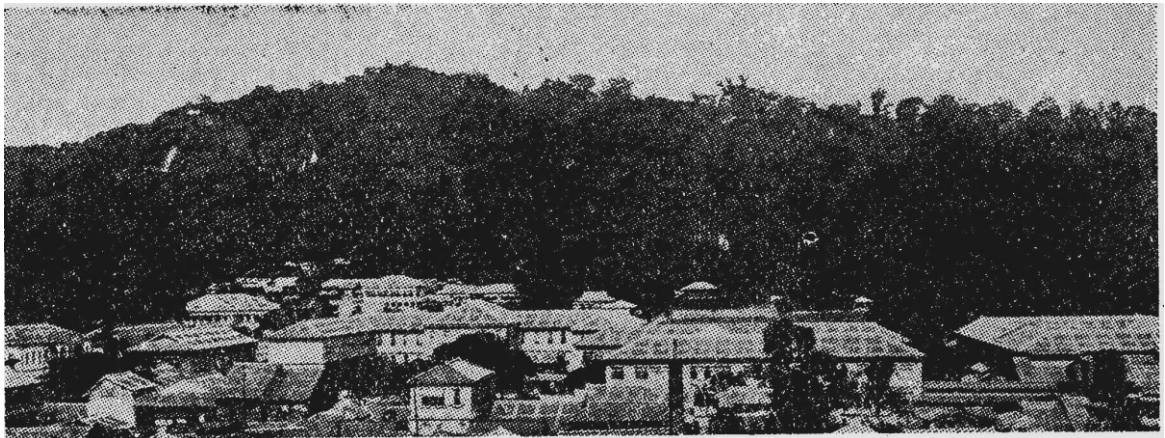
こうして、賊軍の大部分が日向に逃げ込むと、官軍は大挙して同国に逼り、7月24日には都城を抜き、同31日には宮崎の本営を破って隆盛を走らせ、同日、砂土原を占領し、8月2日に高鍋を取り、14日には延岡を陥れた。

隆盛は宮崎から高鍋、延岡を経て長井に到り、ここを本営としたが、この時、彼の軍勢は僅かに3,000で、しかも、兵器も弾薬も極めて乏しく、殆ど銃を持たない部隊すらあったということです。いかに負け続けて来たかがわかります。

官軍はこれを四方から包囲して、8月18日の夜明けをもって総攻撃を開始し、賊軍をみなごろしにしようとしていた。

隆盛ら可愛嶽を越える

ところが、隆盛、利秋らは17日の夜、精銳500を選んで突圍隊を組織して、長井の西方の可愛嶽方面の官軍が最も薄弱なのを探知すると、深夜ひそかに同嶽に攀じ登り、18日の夜明け前にその頂上に達した。そこからは、慄悍をもって聞こえた逸見十郎太が、抜見の大刀を掲げて先頭に立ったあとから一同が続いてまっしぐらに山を駆け下って、一気に官軍の守備を破って三田井に脱出した。



鹿児島 城山 私学校は右方の麓に在った。

賊軍、城山に拠る

こうして隆盛の軍は、日向、大隈、薩摩の諸所で官軍の守兵を破りながら脱兎の勢いで鹿児島に向った。9月1日の夜、その地に入ると、忽ち官軍の守備兵を追って兵器弾薬を奪い、城山に拠って、最後の決戦の準備を整えた。城山は鹿児島市の北部に峙つ小山で、そう大して高くはないが、急坂で、路が狭く、その上、全山が樹木をもって覆われているために、守り易く攻め難い要害とされている。

隆盛の軍は、この時、総勢僅かに372人にしか過ぎなかったが、いづれも強い決死の覚悟の下に、保壘を20余箇所に築いて、以って官軍の攻撃に備えた。

一方、官軍は、やがて大挙して東西から鹿児島島に入込んだが、徒に多くの死傷者を出すまいとの心遣いと、一つは、隆盛が稀世の英雄であるのを惜しんで、なるべくはこれを降伏させようとの心構えとから、急に城山を落とそうとはせず、先づこれを完全に包囲してから、徐に攻撃を始めた。

しかもその攻撃は、日に日に激烈を加え、賊軍の死傷者は次第にその数を増して行った。といて、もはや外から救援の来る当ては全く無かったにもかかわらず、隆盛の決心は固く、ついに9月23日に至って、彼に断じて降伏の意志のないことが明らかになったので、官軍は、その翌24日の午前4時から総攻撃を始めた。

城山 陥る

一方、隆盛は、先に可愛嶽の重囲を脱出した時から、死んで故郷の土とこそなろうとしていたのですから、今や城山の運命も目睫の間に迫ったのを知ると、23日の夜、その起臥していた岩崎谷の洞穴の中に諸将を集めて最後の酒宴を催した。快く永訣の盃を酌みかわしたのであります。こうして翌24日の官軍の総攻撃に身方の各壘が相次いで陥り、敗兵が一時に岩崎台に集まって来るのを見ると、隆盛はいよいよ最後の決戦を試みようとして、利秋、新八、池上四郎、別府晋介、逸見十郎太らの40余人を従え、輿に乗って、岩崎口の保壘に向った。

隆盛の最後

下ること数町、折りしも官軍の弾丸は雨霰と飛んで来ていたが、忽ちその一弾が隆盛の股に中ったと思うと、次の一弾はその腹に中った。隆盛は輿の脇に付添っていた晋介に声をかけて、「晋どん、ここでよか」と輿を止めさせると、静かに地べたにおりて、はるかに東方に向って跪き、両手を合わせて礼拝した。言うまでもなく、天皇のまします帝都の空を拝したのであります。晋介は隆盛の負傷を知ると同時に、この様子を見て、それと悟り、今ははやこれまでと思い諦めて、隆盛の後ろに回ると、涙を呑んで、太刀を引抜き、「御免」と言いざま、その首を打落とした。あゝ一世の英傑も、騎虎の勢いで止むを得なかったとはいえ、一旦朝敵の名を受けては、もはや再び天地の容れるところとならなかった。

彼はここに55才を一期として城山の露と消えた。この地には今も隆盛が終焉の地を記念する碑が建っています。

すでに総師隆盛が死んでしまったのです。利秋以下の諸将も、今はただ死ぬばかりでした。



西郷隆盛終焉の地の碑
鹿児島 城山の北東下

第5話 地方の騒乱と西南の役

彼等はいずれも最後の保塁岩崎口において奮戦して、悉く討ち死しました。

時は同日午前9時でした。折りしも大雨が一時にどっと降り来て、血腥い城山の戦場を洗い清めようとするものの如くであったといわれます。

徴兵の実線能力

こうして、一時は全国をも動揺させた西南の役もここに全く平らいだ。この役に、賊軍側の兵員が、薩摩、大隈、日向の3州の士民から徴発した者を加えて総計40,000余人であったのに対して、官軍側の出征兵員は総計60,831人でして、この内、士族から臨時に徴募した約6,700人を除けば、外は悉く全国からの徴兵、即ち賊軍の所謂百姓兵でした。

彼等の実戦上の能力については、久しく旧武士階級から軽蔑されていたのですが、この役において、初めて所謂鎮台兵の威力を遺憾なく發揮して、訓練さえ施せば、何の懸念もなく平民が士族に打ち勝つことが出来るという実証を天下に示したのです。

なお、この役において、官軍の戦死者は6,278人、負傷者は9,523人、賊軍の死傷者は20,000余人、処刑者は2,764人の多さにのぼった。又、官軍の消費した軍費は実に41,567,724円という巨額でした。

大役の鎮定と人心の安定

とはいえ、これは前にも述べたように、明治維新の大変革の余波であって、新政府にいろいろの党派が出来て権勢を争った事や、政治上、社会上の改革に対して、不平を抱いた者が方々にいた事やが、それこれ一つになって最後の大爆発の原因となったのであるので、この大役の鎮定と共に、久しく動揺していた人心も収まり、海内にまた乱を思う者が無くなった。一つは武力によって事を行おうとしても、徴兵の新制度による官軍の力が既に大に強く、到底これを覆すことの出来ないのがはっきりと分かったからでもあったろう。

こうして、西南の役後は、中央政府の威権が全く確立して、内治は平和のうちにいよいよ進んだ。

さて、隆盛は、郷党の子弟のために叛賊となって、ついにあえない最後を遂げたとは言え、世人は彼が維新の際における勲功を思い、又、その心事に同情して、心から哀悼の意を表さない者は無かった。

隆盛の余栄

明治16年に至り、明治天皇は、隆盛の偉勲を追想してその心情を憐れに思われ、特に侍臣を遣わして遺族の近状を問われた。後、明治22年2月11日、憲法を發布するに当たり、特に彼の罪を赦して賊名を除き、正三位を贈られた。のみならず、更に明治35年6月3日、嗣子の貞太郎を特に華族に列して公爵を授けられた。明治天皇が、いかに臣下を愛されたか、その仁慈の深いことは、啻に地下の隆盛の霊のみでなく、斉しく感佩に耐えません。

維新の三傑

又、西郷隆盛と共に維新の三傑と言われた木戸孝允、大久保利通も彼と前後して世を去ったが、この

第5話 地方の騒乱と西南の役

事をも少しここでお話しておこう。

孝允^{たかよし}は明治10年1月、天皇^{せい}が京都^{きょうと}に行幸^{こじゅう}された時に、聖駕^{じょうらく}に扈從^こして上洛^{こう}していたが、4月ころから病^{やまい}にかゝって、5月26日、西南の役^{こう}のまだ終わらないうちに、ついに京都^{きょうと}で薨^{こう}じた。時に年は44才でした。

利通^{としみち}は翌11年5月14日、東京赤坂^{さんちやう}の仮皇居^かに参朝^{こうじまち}しようとして、午前9時頃^か、馬車^{こうじまち}を駆^かって麴町^{こうじまち}紀尾井町^{きおいちやう}の清水谷^{しみずだに}に差^さしかかった時に、旧加賀藩士^か島田一郎^{がはんししまだいちろう}ら6人の者^{ようげき}に要撃^さされて、ついに刺殺^さされた。年は49才^{あんざつ}でした。彼^{あんざつ}が暗殺^{あんざつ}されたという知らせ^{とうたつ}が鹿児島^{かごしま}県^{けん}下に到達^{とうたつ}すると、かの地^かでは皆大^{かい}いに喜び^{よろこび}、老幼^{ろうやう}男女^{だんな}相告^{あひあひ}げて、快哉^{かいさい}を唱^{とな}え、途^{みち}で遭^あった者^あは互^{たが}いに祝^{しゆく}しあつたのみならず、去年^{きよねん}に西南の役^{こう}に戦死^{せんじ}した者^あのある家^あでは、往々^{おうおう}にして赤飯^{せきはん}を炊^たいて報復^{ほうふく}の意^いを叙^のべた者^あさえいたといわれる。

隆盛^{ついで}を追慕^おする者^あから見^みれば、利通^{としみち}は彼^かれを斥^{しりぞ}けて自滅^{じめつ}させた者^あであったのだから、恨^{うら}みをこれに報^{むく}いようとしたのは当然^{たうぜん}で、島田一郎^{しまだいちろう}らがこれ^あを暗殺^{あんざつ}したのも、趣意^{しゆい}はやはりそこ^あにあったのです。これもまた征韓論^{せいかんろん}の余沫^{よまつ}であったといえます。

こうして、維新^{いしん}の三傑^{さんけつ}は相次^{あいつ}いで皆亡^なくなった。しかし、彼等^あが(隆盛^{ついで}は度量^{どりやう}が海^{うみ}の如^{ごと}く、気宇^{きう}もまた頗^{すこぶ}る大^たきくて徳望^{とくぼう}一世^{いっせい}に高^{たか}く、孝允^{たかよし}は沈着^{ちんちゃく}で思慮^{しりよ}が深^{ふか}く、利通^{としみち}は果断^{かだん}にして見識^{けんしき}がすぐれ、)いずれも至誠^{しせい}をもって国事^{こくじ}に当^あたり、相並^{あいな}んで維新^{いしん}の大業^{たいぎやう}を翼賛^{よくさん}した功績^{こうせき}は、ついに永久^{えいきゆう}に不滅^{ふめつ}です。

赤十字社の起こり

なお、西南の役^{せい}の際^{さい}に、元老院議官^{げんろういんぎかん}佐野常民^{さのつねたみ}、同大給恒^{おおぎゆうひさし}らは新^{あら}たに博愛社^{はくあいしゃ}を起^おこした。天皇^かのご下賜金^かおよび有志^{ゆうし}の寄付金^{きふきん}をもって戦地^{びやういん}に病院^{もう}を設^{しやうびやうへい}け、官軍^{しゆうやう}、賊軍^{しゆうやう}の別^{べつ}なく、傷病兵^{しやうびやうへい}を収容^{しゆうやう}してこれ^あの救護治療^{きゆうごちりやう}に当^あたった。これは、嘗^{かつ}て常民^{じやうみん}がオーストリア^{はくらんかい}の博覧会^みで視^みて来^きた西洋^{せいせい}の赤十字事業^{せきじゆうじぎやう}になら^あったもので、又^{また}、実^{まこと}にわが国^{くに}赤十字^{せきじゆうじ}の起^おこりでありま^す。

(第5話 地方の騒乱と西南の役 終わり。 次は前頁に戻り、第6話 立憲政体の確立 へ)